

はしがき

本書は、「工都」尼崎と「文教住宅都市」西宮の福祉行政・施策と地域福祉の歴史的展開を描くものである。

尼崎市は、近代日本の工業化を担った都市であり、戦後復興期から高度成長期にかけての日本の中心的な工業都市のひとつであった。労働者対策としての「福祉」施策が早期から実施された都市である。全国5,000を超える介護老人福祉施設の中でトップ・レベルの施設運営を行っている喜楽苑も、工都に働く労働者の必要の中で設立されたものである。尼崎市の「先進的な公害対策」も、工都の都市性格を維持する中で生じた施策のひとつに他ならない。

西宮市は、江戸期以来の酒造の街である。灘五郷の西宮郷、今津郷がある。日本で最初のコンビナート誘致を止めた街でもある。日本が高度成長の道を邁進し始めた頃、西宮の市民は、日本最大規模のコンビナートの誘致により工業都市への変貌を遂げることを拒否して、豊かな自然とそれに育まれた地場産業、文化を維持する道を選択した。西宮市は、コンビナート誘致をめぐる昭和30年代半ばの3年間の激動を経て、文教住宅都市としての都市性格の自覚的発展を果たした。

本書刊行にあたっての共同研究は、過去10年間の平野監修、平野、加川、青木、岩井著『西宮現代史 第1巻I』（西宮市、平成18年）の編纂と3年間の平野監修、平野、加川編著『尼崎大気汚染公害事件史』（日本評論社、平成17年）編纂の成果をもとに進められた。先行する二つの研究で明らかにした昭和20年から現在までの西宮の政治・行政の歩みと特質、尼崎の大気汚染・道路公害と環境施策は、本書が対象とする福祉行政・施策、地域福祉考察の前提であり、不可分のイシューである。

本書では、地域福祉と自治体福祉行政を中心に考察するが、背景にある都市行政、地方政治、地域社会、都市環境、住民生活といった多面的課題との関わり

りの中で、福祉を論じようとする。本書のテーマ、対象についての本格的な研究は従来行われていない。

本書が福祉研究者、福祉の実務者、福祉に関心を持つ人々にいささかの貢献が出来れば、執筆者一同これに優る喜びはない。

平野 孝